The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	対話を「触発」する問い
Author(s)	寺田, 俊郎
Citation	臨床哲学のメチエ. 2006, 15, p. 9-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12882
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

対話を「触発する」問い

寺田　俊郎

昨年に続いて洛星高校の「哲学入門」の授業を分担した。担当したのは、本年度第三回で「生命」第二回の授業「死ぬ権利はあるか」。

授業の概要

出席者は 32 人。まず、資料プリント 1 枚を配布し、簡単なレクチャーを行う。安楽死の法律上の分類ならびに尊厳死という概念を解説し、生命倫理学では QOL（生命の質）と SOL（生命の神聖さ）というトピックが対比されて論じられることが多いということ、そしてその際「患者の自己決定権」が問題となり、そこから今回のテーマである「死ぬ権利」という問題が出てくるということを説明した。続いて、生徒の質問を受け付けるという形で議論を促した。

レクチャーが必ずしもわかりやすいものではなかったのだろう、生徒達の出足は重かった。が、一人が発言したのをきっかけに次々手が上がり、活発な議論になった。予想に反して、生命の絶対的価値を主張する発言は見られず、死の自己決定や自殺の権利に意見が集中した。とくに、個人と共同体の関係をめぐる意見の交換が活発になされた。いくつか紹介する。

- 社会とは個人をサポートするものである。とすると「死ぬ権利」は社会を裏切ることになるのではないか。
- （同様に）社会のモラルをこわすことにならないか。
- 「生きる」ということが共同体の前提になっているから、勝手に死ぬことは認められない。
- 社会のモラルは個人を超える権威か。
- 個人が生きるために共同体があるのであって、共同体を生かすために個人が生きるのではない。本末転倒している。
- 自殺する人は共同体からはみ出した人であり、共同体の真ん中にいる人は自殺なんかしない。
- 社会への貢献を生きる前提にしてしまうと「ひきこもり」の人は生きながら死んでいることになってしまう。

発言の要点を黒板に書き留めながら聞いたが、興味深い意見が畳みかけるように出て、有望な議論の糸口があちこちに見えた。しかし、論点がやや多岐にわったってしまったので、４５分くらい経過した時点で、死ぬ権利と社会・共同体・他の人々との関係に絞って「問い」をつくるという課題を出し、生徒の間でグループ・ディスカッションをするよう指示した。グループ構成はとくに指示

しなかったが、生徒は適当に五つか六つのグループに分かれ活発に話し合っていた。１０分ほど時間をとり、話し合いの結果を発表するよう促したが、「権利という言葉がよくないのでは？」といった意見は出るものの、残念ながら「問い」を引き出すことはできなかった。苦肉の策として、私が「死ぬ死なないを決めるのは個人である。ただしその他の人々の関係を考えなければならない」というテーゼを立て、これをどう思うか、賛成か反対か、生徒達に意見を求めたが、反応は芳しくなかった。なかには、グループ・ディスカッションの続きを熱心に続けている生徒達もいて、ややザワザワしていた。

昨年度同様、何人かの生徒が授業後に教卓の周りに集まってきて、直に意見を述べていった。７０分では短いので、このテーマで１日授業をするように学校側に頼んでくれ、という意見も聞かれた。(以上の概要はコーディネータの樫本氏の記録に基づく。)

若干の考察

昨年度の学年に負けず、授業に乗ってくる生徒達だった。育ててこられた担任団の先生方に敬意を表する—こういうと、口幅ったく聞こえるかもしれないが、あのように授業に参加する生徒達は、もちろんたまたまそういうタイプの生徒が集まったという面もあるだろうが、なによりも中学時代から担任団にどのように遇されてきたかによるところが大きい、というのが私が経験から学んだところである。あいかわらず、思わぬ方向からの意見

にはっとさせられることもしばしばで、授業をしていて実に快かった。
いくつか反省点を述べる。

・グループ・ディスカッションから全体の討論に戻るときには、やはり工夫が必要である。グループの代表者にディスカッションの内容を報告することを指示するなど。昨年度は、特に工夫をしなくてもグループ・ディスカッションから全体討論に難なく復帰できたので、今年も同じような感覚でいたが、そうはいかなかった。そうはいかないのがふつうだろう。
・さまざまな視点からの意見が出されたことは、もちろんよいことであり、生徒達も面白かったことと思うが、それをもとにもう一歩踏み込んだ哲学的議論にもっていくことができなかったのはたいへん悔いが残る。哲学カフェをはじめあらゆる哲学対話の醍醐味は、そのプロセスにあると私は考えている。
・もう一歩踏み込んだ哲学的議論にするためには、「他者に危害を加えなければ何をしてもいいのでは？」または「生命は誰のもの？」という問いを提示すればよかったと、今にして思う。こういった問いは、授業を準備する段階で予想していたものだが、なぜかあの議論の文脈で適切に投げかけることができなかった。

このような反省点はあるものの、少なからぬ生徒達がディスカッションを楽しんでくれたようで、私自身楽しい授業だった。

さて、以上のような報告に対しては「洛星は特別な学校だから」という反応がよくある。それはその通りだが、しかし、その「特別な」の意味はもう少しきめ細かく考えてみる必要がある。先にも書いたように、洛星であっても今回のような授業が成立するとは限らない。先にも述べたように、生徒達が担任団に（そしてその他の教科担当者たちに）どのように遇されてきたか、が大きいように思う。「遇されてきたか」には「教えられてきたか」も含まれるが、それに尽きるものではないと感じる。ここでは余裕がないが、いずれそのようなこともていねいに考えてみたい。

（てらだとしろう）